

迷子

泉鏡花作

全一章

お孝かうが買かひい物ものに出で掛かける道みちだ。中里町なかざとまちから寺町てらまちへ行ゆかうとする突當つきあたりの交番かうばんに人ひとだかりがして居ゐるので通過とほりすぎてから小戾こもどりをして、立停たちどまつて、少すこし離はなれた處ところで振返ふりかへつて見みた。

ちやうど今兩いまあめが晴はれたんだけれど、蛇じやの目めの傘かさを半開はんひらきにして、うつくしい顔かほをかくして立たつて居ゐる。足駄あしたの緒をが少すこし弛ゆるんで居ゐるので、足許あしもとを氣きにして、踏ふみ揃そろへて、袖そでの下したへ風呂敷ふろしきを入いれて、胸むねをおさへて、顔かほだけ振向ふりむけて見みて居ゐるので。大方女おほかたをんなの身みでそんなもの見みるのが氣恥きはづかしいのであらう。

ことの起原おこりといふのは、醉漢ゑひどれでも、喧嘩けんくわでもない、意趣斬いしゆぎりでも、竊盜せつたうでも、掏賊すりでもない。六ツむつばかりの可愛かはいいのが迷兒まひびになつた。

「母様おつかさんは何うした、うむ、母様おつかさんは、母様おつかさんは、母様おつかさんは。」

と、見張員が口早に尋ね出した。なきじやくりをし
い／＼、

「内に居るよ。」

巡査は交番の戸に凭懸つて、

「お前一人で来たのか、うむ、一人なんか。」

頷いた。仰向いて頷いた。其膝切しかないものが、
突立つてる大の男の顔を見上げるのなもの。仰向い
て見ざるを得ないので、然も、一寸位では眼が届か
ない。頤をすくつて、身を反して、ふツさりとする
髪が帯の結目に觸るまで、いたいけな顔を仰向けた。
色の白い、うつくしい兒だけれど、左右とも眼を煩
つて居る。細くあいた、瞳が赤くなつて、泣いたの
で睫毛が濡れてて、まばゆさうな、その容子ツたら
ない、可憐なんで、お孝は近づいた。

「一體何處の兒でございませう。方角も何も分ら
なくなつたんだよ。仕様がなしたことね、ねえ、お前
さん。」

と長屋ものがいひ出すと、すぐ應じて、

「ちつとも此邊ぢやあ見掛けない兒ですからね、
だつて、さう遠方から来るわけはなしさ、誰方が御

存じぢやありませんか。」

誰も知つたものは居ないらしい。

「え、お前、巾着でも着けてありやしないのか

ね。」

と一人が踞つて、小さいのが腰を探つたがない。

ぼろを着て居る、汚い衣服で、眼垢を、アノせつせと拭くらしい、両方の袖がひかつてゐた。

「仕様がないのね、何にもありやしないんです

よ。」

傍に居た肥つたかみさんが大きな聲で、

「馬鹿にしてるよ、こんな兒にお前さん、札をつ

けとかないつて奴があるもんか。うっかりだよ、眞個にさ。」

とがむしやらかなものいひで、叱りつけたから吃驚して、わツといつて泣き出した。何も叱りつけなくツたつてよささうなもんだけれど、蓋し敢てこの兒を叱つたのではない。可愛さの餘り其不注意なこの兒の親が、恐くかみさんの癩にさはつたのだ。

「泣くなよ、困つたもんだ。泣くなつたら、可いか、泣いたつて仕様がなない。」

また一層聲をあげて泣き出した。

中に居た休息員は帳簿を閉ぢて、筆を片手に持つ

たまゝで、戸をあけて、

「何處か其處等へ連れて行つて見たらば何うだ

ね。」

「まあ、もうちつと斯うやつとかう、いまに尋ねに來ようと思ふから。」

「それも左様か。おい、泣かんでも可い、泣かないで、大人しくして居るとな、直ぐ母様が連れに來るんぢや。」

またアノ可愛いふりをして、頷いて、其まゝ泣きやんで、ペソを搔いて居る。

風が吹くたびに、糖雨を吹きつけて、ぞつとすほど寒いので、がた／＼ふるへるのを見ると、お孝は堪らなかつた。

彌次馬なんぎ、こんな不景氣な、張合のない處には寄着はしないので、むらがつてるものゝ多くは皆このあたりの廣場でもつて、びしよ／＼雨だから尻を引摺つてた小兒等で。泣くのがおもしろいから「やい、泣いてらい！」なんて、景氣のいゝこと

をいつて見物して居る。

子守がまた澤山寄つて居た。其中に年嵩な、上品
なのがお守をして六つばかりの女の兒が着附萬端姫
様といはれる格で一人居た。その飼犬ではないらし
いが、毛色の好い、耳の垂れた、すらつとしたのが、
のつそり、うしろについてたが、皆で、がや／＼い
つて、迷兒にかゝりあつて、うつかりしてる隙に、
房さりと結んでさげた其姫様の帯を銜へたり、ハツ
口をなめたりして、落着いた風でじやれてゐるのせ、
附添が、つと見つけて、びツくりして、叱！ とい
つて追ひやつた。其は可い、其は可いけれど、犬だ。

悠と迷兒のうしろへいつて、震へて居るものを、
肩の處ペろりとなめた。のはうづに大きな犬なので、
前足を突張つて立つたから、脊は小ぽけな、いぢけ
た、寒がりの、ぼろツ兒より高いので、いゝ氣にな
つて、垢染みた襟の處を赤い舌の長いので、ペろり
となめて、分つたやうな、心得てゐるやうな顔で、
澄した風で、も一つやつた。迷兒は悲さが充滿な
ので、そんなことには氣がつきやしないんだらう、

巡査にすかされて、泣いちやあ母様か来てくれない
のとはかり思ひ込んだので、無理に堪へてうしろを
振りかへて見ようといふ元氣もないが、むず／＼する
ので考へるやうに、小首をふつて、促す處ある如く、
はればつたい眼で、巡査を見上げた。

犬はまたなめた。其舌の鹽梅といったらな、い
やにべる／＼して頗るをかしいので、見物が一齋に
笑つた。巡査も苦笑して、

「おい。」とさういつた。

お孝は堪らなかつた。かはいさうで／＼かはいさ
うでならないのを、他に多勢見て居るものを、女の
身で、とさう思つて、うつちやつては行きたくなし、
さればツて見ても居られず、ほんとに何うしようか
と思つて、はツ／＼したんだから、此時もう堪らな
くなつたんだ。

いきなり前へ出て、顔を赤くして、

「私が、あの、さがしますから。」

と、口の中でいふとすぐ抱いた。下駄の泥が帯に
べつたりとついたのも構はないで、抱きあげて、引

占めると、肩の處へかじりついた。

ぐるツと取巻かれて恥しいので、アタフタし、駈け出した位急足で踏出すと、おもいもの抱いた上に、落着かないからなりふりを失った。

穿物の緒が弛んで居たので踏返してはつたり横に韓ぶと一姿が亂れる。

皆で哄と笑った。お孝は泣き出した。

【完】